

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 2 年 7 月 7 日現在

機関番号：14301

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2019

課題番号：16K03044

研究課題名(和文) 明治維新と天皇の代替り儀式 葬儀・即位式・大嘗祭

研究課題名(英文) Meiji Restoration, Emperors, and Imperial Succession Ceremonies: Funeral Rites, Enthronement Ceremonies, Daijosai (Great Thanksgiving Festival)

研究代表者

高木 博志 (Takagi, Hiroshi)

京都大学・人文科学研究所・教授

研究者番号：30202146

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,800,000円

研究成果の概要(和文)：明治維新と天皇代替り儀式を、江戸時代から明治維新の変化、大正・昭和大礼の社会への段階的な浸透、1945年の敗戦による戦前・戦後の連続・断絶を、2019年秋の即位・大嘗祭を視野に入れて考えることができた。大きな特色は、天皇の代替り儀式の問題を、国民道徳とかかわった史跡、「仁徳天皇陵古墳」の名称で世界遺産登録された陵墓問題、御物、神話や物語の社会におけるありようなど、単なる儀式だけではなく天皇制の文化的な諸要素、総体との関わりで考究した点にある。

研究成果の学術的意義や社会的意義

天皇の代替り儀式を、明治維新から近現代へと政治・社会・文化の総体において捉えた。とりわけ天皇制の社会への浸透が、20世紀の大正・昭和大礼の時期におきたことを解明した。そして4年の研究期間の諸論考の中で、即位・大嘗祭のみならず、史跡や陵墓、日本遺産などの諸分野において「史実と神話」のせめぎ合いが近現代におこり、天皇の神話性が象徴天皇制においても不可欠である構造を論じた。泉涌寺にみる近代皇室の仏教信仰の継続も明らかにした。また代替り儀式や陵墓問題の研究成果を『朝日新聞』などのメディアでも伝えた。

研究成果の概要(英文)：This project has looked at rites of imperial succession from the Meiji Restoration analysing their gradual permeation into society at the time of the ascension to the throne of the Taisho and Showa emperors, as well as the (dis)continuity with pre-war practices in the wake of the 1945 defeat in the Second World War. The most recent Enthronement and Great Thanksgiving (Daijosai) Ceremonies held in the fall of 2019 have also been taken into consideration. The distinguishing feature of this study is the fact that it has shed light not only on the rites themselves, but also on the modern emperor system in its entirety, by investigating the relationship between national morality and historical landmarks or the Imperial treasures, the registration as World Heritage of a historical site under the name "Tomb of Emperor Nintoku," the continuation of Buddhist faith within the Imperial Household, or the role of myths and stories in society.

研究分野：日本近代史

キーワード：代替り儀式 即位式 大嘗祭 陵墓 世界遺産 名教的史跡 泉涌寺 古都

## 様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

(1) 天皇代替り儀式(葬儀・即位式・大嘗祭)を単なる儀礼研究にすませるのではなく、近現代史研究、近代天皇制の全体のなかに位置づけて考察を進めたいという意図があった。また長年にわたる、泉涌寺・賀茂社・橿原神宮・長岡天満宮などの畿内の社寺史料調査の実績と、京都府立京都学・歴史館・京都市歴史資料館・奈良県立図書情報館などの京都・奈良の行政文書、宮内公文書館や国立国会図書館など政府史料で、代替り儀式と社会の変容を位置づけたいと思った。

(2) 京都大学人文科学研究所で共同研究「近代天皇制と社会」研究班(2012~2016年)では、約30人の研究班員を組織し、代替り儀式のみならず橿原神宮、国体論、皇室財産、不敬事件、遙拝所など天皇制に関わる諸要素が社会に浸透していくことを解明しようとしたが、まさに天皇代替り儀式を天皇制と社会のなかで考える方法論に根ざしていた。

### 2. 研究の目的

当初の研究の目的としては、以下をかかげた。近世から近代への移行の中で、天皇代替り儀式(葬儀・即位式・大嘗祭)の変化を実証的に解明する。1990年の平成の代替りに際し、即位式・大嘗祭の研究が多く出されたが、その後は進展しなかった。ここ20年間に、とりわけ前近代の天皇の死と葬送儀礼の研究は進んだ。さらに泉涌寺の近世・近代文書や、宮内庁書陵部・宮内公文書館や京都府立京都学・歴史館・国立公文書館で情報公開が進んで新しい史料状況が現れた。本研究では情報公開が進んだ宮内庁の史料や泉涌寺などの社寺の新出資料を用いて、孝明・明治・大正の三代天皇の、葬儀から即位式・大嘗祭へと流れる代替り儀式(天皇の死から再生)を一連の過程と捉えてその変容をトータルに研究する。即位式・大嘗祭のみならず葬儀をも構造的に含めて考察することが本研究のポイントである。

### 3. 研究の方法

(1) 泉涌寺文書の研究・分析を継続的に続けた。皇室の菩提寺とされる泉涌寺についてのイメージは、実は1880年代の「旧慣」保存の時期に創り出され、明治初年の皇室の神仏分離後も東京の皇室・皇族における私的な仏教信仰が、国家神道の公的な皇霊祭祀と併存しつつ継続することをあきらかにした。研究では、泉涌寺の墓制、そして近世の葬儀のありかたを深めることとなった。

(2) 研究期間中に、東京の国立国会図書館憲政資料室・宮内公文書館・国立公文書館、京都府立京都学・歴史館・奈良県立図書情報館などにおいて、皇室や代替りや陵墓・古社寺にかかわる公文書や関係史料の調査をおこなった。こうした調査にもとづき、以下の研究を展開した。

2019年7月の百舌鳥・古市古墳群の世界遺産登録は、陵墓の歴史学の研究にも大きな影響を与えることになった。そもそも「仁徳天皇陵古墳」という資産名が、文化財としての大山古墳の学術名称ではなく、大正期以来の津田左右吉の記紀批判にもとづく戦後歴史学の成果と齟齬を来す状況を招いている。そうした中で、明治維新から戦後までの陵墓の制度、治定のありよう、皇霊祭祀や近代皇室の葬制との関係性などの研究を進めた。

個別実証研究として、富岡鉄斎による南朝の尹良親王の顕彰・治定活動を分析する中で、のちに鉄斎が治定が間違っているのに気づいたとき、天皇の決定は不動、アプリアリに受け入れるものと鉄斎は考えて変更しない。この天皇の決定や勅は、たとえ誤っていても無謬で、臣民はアプリアリに受け入れるものとする構造は、近代天皇制の根幹に関わるものであり、記紀神話、皇室祭祀を考える上で重要であろう。

本課題にかかわり、2019年に院政以来の生前譲位という、「平成」から「令和」への代替り儀式を経験した。「令和」の即位式・大嘗祭などは、基本的に、登極令下の1928年昭和大礼のありよう、大嘗祭の位置づけを踏襲していることを確認するとともに、現代の天皇制を考察した。この問題に関わっては、1928年の昭和大礼が明治維新60年と重なり、大衆社会状況下で、新たなメディア状況で柔らかな国民統合が行われたこと、明治大帝、明治維新の顕彰というイデオロギーが1928年には重要であったことも明らかにした。

(3) 再度確認するが、全体を貫く方法は、天皇代替り儀式(葬儀・即位式・大嘗祭)を単なる儀礼研究にすませるのではなく、近現代史研究、近代天皇制の全体のなかに位置づけることにあった。

### 4. 研究成果

(1) 2016年にはハイデルベルク大学やライプツィヒ大学で、英語で古都奈良や京都、天皇制に関わる講演をおこない、2019年7月にはハイデルベルク大学で日本語で富岡鉄斎の南朝顕彰と陵墓治定論を講演した。ドイツでの古都奈良・京都の報告は、Takagi Hiroshi, *The Restoration of the Ancient Capitals of Nara and Kyoto and International Cultural Legitimacy in Meiji Japan*, (*The Meiji Restoration :Japan as a Global Nation*, Edited by Robert Hellyer and Harald Fuess, Cambridge University Press, 2020)として、公刊された。

(2) 2017年にはイェール大学で「明治維新50年、60年の記憶と顕彰 1917年、1928年の政治文化」を報告し、この論文はダニエル・V・ポツマン他編『[明治一五〇年]で考える 近代移行期の社会と空間』(山川出版社、2018年)に収録され、同名の英語論文、The 50<sup>th</sup> and 60<sup>th</sup> anniversaries of the Meiji Restoration :Memory, Commemoration and Political Culture in the Pre-War Period, Japanese Studies (Taylor& Francis Online),Volume38, December 2018、として発表された。

(3) 天皇代替り儀式を、近代天皇制や社会のなかで総体として考える研究は、高木博志編『近代天皇制と社会』(思文閣出版、2018年)で16篇、総頁540の共同研究報告書としてまとめた。

(4) 泉涌寺の墓制、近代の皇室の仏教信仰の継続については、「近代皇室における仏教信仰 神仏分離後の泉涌寺を通して」(祭祀史料研究会編『祭祀研究と日本文化』塙書房、2016年)の論考をもとに研究を継続している。皇室の近世京都で生まれた世代の東京での仏教信仰の継続と、東京生まれの大正期以降の皇族たちとの世代論については今後深める必要があるだろう。

(5) 2019年の天皇代替り儀式の経験を踏まえて、「近代天皇制と「史実と神話」 代替わりに考える」(『世界』929号、岩波書店、2020年)をあらわし、7世紀天武朝の大嘗祭の生成から、2019年の代替り儀式までの制度的な変遷、「史実と神話」の未分離をめぐり、陵墓や文化財問題にも通底するものとして論じた。さらにJohn Breen, Maruyama Hiroshi, Takagi Hiroshiの共編によるKyoto's Renaissance :Ancient Capital for Modern Japan, Renaissance Books,2020,を出版し、そこに代替り儀式の近世から明治維新への変化を跡づけた、Takagi Hiroshi, The Emperor System and Kyoto :Images of the Ancient Capitalの論考を寄せた。

(6) 2019年7月の世界遺産と陵墓問題に関わって、今尾文昭・高木博志編『世界遺産と天皇陵古墳を問う』(思文閣出版、2017年) 天皇制と文化財の歴史について、岩城卓二・高木博志編『博物館と文化財の危機』(人文書院、2020年)を刊行した。

(7) 富岡鉄斎の国体論や陵墓治定論に関わり、「富岡鉄斎が顕彰する国史」(『史林』101巻1号、2018年)を発表した。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計7件（うち査読付論文 3件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 高木博志	4. 巻 929号
2. 論文標題 近代天皇制と「史実と神話」 代替わりに考える	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 世界	6. 最初と最後の頁 57～67
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Hiroshi TAKAGI	4. 巻 38
2. 論文標題 The 50th and 60th Anniversaries of the Meiji Restoration Memory, Commemoration and Political Culture in the Pre-War Perood	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Japanese Studies ( Taylor&Francis Online)	6. 最初と最後の頁 329～341
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 高木博志	4. 巻 58
2. 論文標題 金光教と遊廓・花街 都市布教と民衆	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 金光教学	6. 最初と最後の頁 50～124
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 高木博志	4. 巻 101巻1号
2. 論文標題 富岡鉄斎が顕彰する国史 名教の精神を芸術に寓す	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 史林	6. 最初と最後の頁 150～188
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 高木博志	4. 巻 なし
2. 論文標題 近代皇室における仏教信仰 神仏分離後の泉涌寺を通して	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 祭祀史料研究会編『祭祀研究と日本文化』塙書房	6. 最初と最後の頁 305～319
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 高木博志	4. 巻 なし
2. 論文標題 修学旅行と伊勢	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 ジョン・ブリーン編『変容する聖地 伊勢』(思文閣出版)	6. 最初と最後の頁 237～251
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 高木博志	4. 巻 15
2. 論文標題 解題 茨木キリシタン遺物発見をめぐる	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 新修 茨木市史年報	6. 最初と最後の頁 1～7
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計6件(うち招待講演 5件/うち国際学会 2件)

1. 発表者名 高木博志
2. 発表標題 近代天皇制と「史実と神話」-文化財・天皇陵・歴史意識
3. 学会等名 歴史学入門講座(大阪歴史科学協議会・大阪歴史学会)(招待講演)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 高木博志
2. 発表標題 近現代史のなかの映画「祇園祭」
3. 学会等名 京都大学人文科学研究所・人文研アカデミー
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 高木博志
2. 発表標題 富岡鉄斎が顕彰する国史
3. 学会等名 史学研究会（招待講演）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 高木博志
2. 発表標題 明治維新50年、60年の記憶と顕彰 1917年、1928年の政治文化
3. 学会等名 The Restoration and its Afterlives: Social Change and the Politics、於イエール大学（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 高木博志
2. 発表標題 The Old Capital in Modern Times and Images of Kyoto
3. 学会等名 New insights into The Cultural History of Japan's Ancient Capital（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 高木博志
2. 発表標題 Meiji Restoration and the Revival of Ancient Culture
3. 学会等名 Leipzig University (招待講演)
4. 発表年 2016年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 岩城卓二・高木博志 共編	4. 発行年 2020年
2. 出版社 人文書院	5. 総ページ数 194
3. 書名 博物館と文化財の危機	

1. 著者名 高木博志 編	4. 発行年 2018年
2. 出版社 思文閣出版	5. 総ページ数 552
3. 書名 近代天皇制と社会	

1. 著者名 今尾文昭・高木博志 共編	4. 発行年 2017年
2. 出版社 思文閣出版	5. 総ページ数 291
3. 書名 世界遺産と天皇陵古墳を問う	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----